

埼玉丸墓山古墳と大里甲山古墳

— 武藏国造家内紛と大型円墳 —

中村倉司

はじめに

534年、武藏国造職を巡って笠原直家で内紛が勃発した。小杵は上毛野君小熊、使主は畿内大王安閑天皇に応援を要請した。その結果、小杵は殺害され、使主は勝者となり国造職を得た。

埼玉古墳群は、武藏国造家の墓と言われているが、事実だとすれば使主の墓はどの古墳に比定することができるであろうか。時期的に整合するのは、日本最大の円墳である丸墓山古墳が相当する。一方小杵の墓は、何処に求めたらよいのであろうか。丸墓山古墳群から西へ約10km、荒川の対岸に丸墓山古墳にも見劣りのしない大円墳の甲山古墳がある。近接する二つの大円墳は、何を語るのであろうか。

1 丸墓山古墳と甲山古墳

(1) 丸墓山古墳

行田市埼玉に所在する埼玉古墳群内の一古墳である。当古墳群は、5世紀後半から7世紀中頃まで継続し、大型前方後円墳8基・大型円墳2基・大型方墳1基などで構成されている。丸墓山古墳は、日本最大の規模を誇る円墳である。

○形と規模

径105m・高さ18.2mを計る。墳高は、全長200m級の大型前方後円墳に匹敵し、東日本では最も高い墳丘を有する古墳である。「古代の中国では、身分の差を造墓にあらわすのは古墳の平面的な大きさ（たとえば墳丘の長さや径）ではなく、“墳高”が重視されていた」（森1990）という。我が国でも『筑後風土記』には、「有筑紫君磐井之墓墳 高七丈 周六十丈」と高さを先に記している。

なお、前方後円墳や帆立貝式古墳とも推定された時期も存在したが、現在では円墳であることが確認されている。

○時期⁽¹⁾（第1表）

丸墓山古墳は、前期型の前方後円墳と考えられていたために埼玉古墳群最古と捉えられていた（甘粕1970）。その後、円墳と判明した丸墓山古墳は、近在の円墳八幡山古墳との関連から一転最新の時期が与えられた（増田1982）。次いで杉崎茂樹は、埴輪の検討から稻荷山古墳→丸墓山古墳→二子山古墳の編年を導き出した（杉崎1988）。現在は稻荷山古墳→二子山古墳→丸墓山古墳の順序が与えられている。この根拠は、榛名山二ツ岳を出現させた噴火による火山灰（FA）の出土状況による。つまり、FAが稻荷山古墳と二子山古墳では周壕内、丸墓山古墳では墳丘下から確認されたことによる（田中1994）。稻荷山古墳では、周壕覆土の褐色土層中にFAと思われる「灰白色の粘土層をはさむ」とある。このFAが褐色土層のどのような位置に堆積したいたのかは不明である。二子山古墳では、FAと思われる層がほぼ壕底に堆積している⁽²⁾。但し、二子山古墳と丸墓山古墳出土埴輪の時期については、検討を要する資料も存在するが両者の前後関係は概ね容認できる。なお、丸墓山古墳の「FAは旧表土の最上層ではなく、降下後ある一定の時間をおいて築造されたことが予想され、二子山古

	甘粕	金井塚	増田	斎藤	石野	増田	杉崎	増田	田中	甘粕	坂本	岡本	増田	太田	城倉
	1970	1979	1982	1984	1985	1987	1988	1991	1994	1995	1996	1997	1999	2007	2009
5c後	丸墓山	丸墓山	稻荷山	稻荷山	稻荷山・丸墓山	稻荷山	稻荷山	稻荷山	稻荷山	稻荷山	稻荷山	稻荷山	稻荷山	稻荷山	稻荷山
6c前	稻荷山	稻荷山	二子山・愛宕山	梅塚	二子山	二子山・愛宕山	二子山・愛宕山	丸墓山	丸墓山	二子山	丸墓山	二子山	二子山	二子山	二子山
6c後	二子山	二子山	二子山・愛宕山	二子山・鐵砲山・奥の山	二子山	二子山・愛宕山	二子山・愛宕山	丸墓山	丸墓山	二子山	丸墓山	丸墓山	鐵砲山・愛宕山	丸墓山	瓦塚・天祥正寺裏・奥の山
7c前	鐵砲山	鐵砲山	瓦塚	鐵砲山・瓦塚・中の山	瓦塚・中の山	鐵砲山・瓦塚	鐵砲山・瓦塚	鐵砲山・瓦塚	鐵砲山	鐵砲山	鐵砲山	鐵砲山	鐵砲山	鐵砲山	鐵砲山・奥の山
	(真觀寺)	中の山	(丸墓山)					奥の山	瓦塚	将軍山	將軍山	將軍山	將軍山	將軍山	將軍山
	(若王子)	將軍山	將軍山					將軍山	將軍山	將軍山	將軍山	將軍山	將軍山	將軍山	將軍山

※各古墳の年代は大凡の目安であり、筆者が勘案したものもある。

第1表 埼玉古墳群における各古墳の想定時期の推移

墳との時期差は比較的大きなものと考えられる」(田中1994)という。FAの降下時期は、520年～525年頃とも言われている。

○被葬者

杉山晋作は、稻荷山古墳に続く二子山古墳と丸墓山古墳をそれぞれ使主と小杵に関わる墓と考えた。小杵は、国造争乱で敗れたために前方後円墳を築造することが適わなかったとした(杉山1992)。坂本和俊も同様の見解を示している(坂本2001)。

(2) 甲山古墳

熊谷市冴塚に所在する古墳である。本古墳が所在する旧大里村内には、6世紀前半の前方後円墳である楓山古墳・東山古墳や同後半のとうかん山古墳・伊勢塚古墳がある。

○形と規模

本古墳は、三段築成の円墳で径90m、高さ11.5mを計る。県内では、丸墓山古墳に次ぐ規模を有する。なお墳形は、八幡神社築造によって造成されたためか帆立貝式古墳にも見えるが、円墳であることは間違いないであろう。

○時期

若松良一は6世紀中葉(若松1987)、橋本博文は6世紀第3四半期(橋本1987)と捉えている。

○被葬者

『大日本國誌 武藏國』(内務省地理局編)に「无邪志国造兄多毛比命ノ墓」と見える。しかし、それ以前に編まれた『武藏志』、『武藏志稿』⁽³⁾には、被葬者についての記載がない。兄多毛比命とは、『国造本紀』に无邪志国造の初祖として紹介された人物である。

2 武藏国造の争乱の検討

「武藏国造笠原直使主與同族小杵、相争国造、使主・小杵、皆名也。経年難決也。小杵性阻有逆。心高無順。密就求援於上毛野君小熊。而謀殺使主。使主覺之走出。詣京言状。朝廷臨断、以使主

為國造。而誅小杵。國造使主、悚喜交懷、不能默已。謹為國家、奉置橫渟・橘花・多氷・倉櫟、四處屯倉、是年也、太歲甲寅。」『日本書紀』卷一八、安閑天皇元年（534）の条。

①「武藏國造笠原直使主與同族小杵、相爭國造使主・小杵、皆名也。」

この争乱を経て使主は国造に就任するのであるが、それを知る後世の編者が使主を国造と記したとされる。武藏国造は笠原直にかかるもので、これは既に笠原直が国造家としての地位を世襲していることを表現しているものと見たい。

「同族」ということから、これは埼玉古墳群出現に係わる争乱（埼玉古墳群と他集団）ではなく、同古墳群の展開中の出来事と捉えるのが適当である。

②「經年難決也」

両者の争いは、話し合いでも武力でも解決しなかったのだろう。そこで、小杵は次なる行動、つまり上毛野君への応援を要請したのである。それまでの経過が「經年」を要したと言うことになる。雨宮龍太郎は、「經年」を父祖以来の世代を越えた長期間と捉える（雨宮2006）。しかし「代々」である場合、銘文鉄剣では「世々」と表現されていることから、雨宮説⁽⁴⁾は当たらないだろう。両者のいがみ合いの期間が単年ではなかったことを記しているにすぎない。

③「小杵性阻有逆。心高無順」

小杵は、反逆者として歴史に名を残さなければならなかった。筑紫君磐井も「豪強暴虐」との評価に甘んじている。しかし、それは為政者側からの評価である。

④「密就求援於上毛野君小熊。而謀殺使主」

小杵が上毛野に援軍を求めたということは、小熊の応援を得て使主を誅すれば小杵は国造になれたと言うことを意味する。国造職は、畿内大王の任命を受けるのが形式であろうが、「当國の幹了しき者を取りて、其の国郡の首長を任せよ」（『日本書紀』成務天皇四年二月朔条）とあるように、在地豪族としての強大な権力があれば任命せざるを得ないような状態であったのである。

使主は、杖刀人首を輩出した乎獲居臣の系譜に属する本宗家だったのであろう。しかし、大王家とのパイプを持たない小杵は、上毛野に援を求めるを得なかつたのである。

なお小熊は、「上毛野君小熊」として記されていることから、「国造」であったかは不明である。

⑤「使主覺之走出。詣京言狀。朝廷臨斷、以使主為國造。」

「經年難決」のいざこぎは、小杵の勝利かと思われた。使主は、畿内に敗走したのである。本貫地を離れなければならない逼迫した状況に追い込まれた。しかし、朝廷に謁見を果たした使主は、この形勢を逆転した。使主はこの時国造になったのであるが、笠原氏は先々代の稻荷山古墳主から既に国造に認証されていたと考えられる。

⑥「而誅小杵」

小杵は殺害された。誰が、殺害したのであろうか。「磐井の乱」と同様に朝廷軍が東国まで派兵されたのであろうか。しかし、その記載がないところを見ると派兵は為されなかつたと見るべきである。小杵を全面支援することに危機を感じた小熊が朝廷側に寝返つたことも考えられる。小熊も当然、磐井の乱の結末については知っていたであろう。朝廷に反旗を翻したにもかかわらず、懲罰が下されないのは不思議である。しかし翌年には、緑野屯倉を献上することになる。これが、史実だとすれば大和王権と上毛野政権との力関係は歴然としたものであったと推察される。

なお、筑紫君磐井の独立戦争は、朝廷側が勝利するまで約1年半を要した。しかし、先の状況を

考えると武蔵国造の争乱は、比較的短期間で決着を見たのではないだろうか。

⑦「国造使主、悚喜交懐、不能默己。謹為国家、奉置横渟・橘花・多氷・倉櫟、四處屯倉」

屯倉の設置は、国策であり「以使主為国造」の条件であった。南武蔵の橘花・多氷・倉櫟の三処は、武蔵国造家にとっては遠隔地である。それに対し横渟屯倉は、武蔵国造家の本貫地とは元荒川を挟んだ至近距離に位置する。

屯倉を敗者小杵の本貫地とすると、南武蔵か横見郡がその候補地になるが、同族であることを考えると後者に比定することが妥当と考えられる。

⑧「是年也、太歲甲寅」

「是年」とは、使主の朝廷謁見、国造職就任、小杵誅殺、屯倉献上の年と言うことになる。しかし、これら一連の事象が滞りなく行われたという保証はない。確定的なのは、屯倉献上がこの年に行われたということである。争乱の始まりは「経年難決也」とあることから、継体期に遡ることになる。

3 武蔵国造争乱の疑義

この争乱を全くの虚構であると考える研究者は少ない。しかし、原島礼二は、「争乱物語」(原島1987)と表現し、利根川章彦は「考古学的に見る限り、『武蔵国造の乱』は虚構である」と捉える(利根川2003)。武蔵国造争乱の7年前に勃発した「磐井の乱」と磐井の墓について、その真偽を疑う研究者は少ない。

(1) 時 期

本稿では、この争乱記事の時期や内容を史実と考えている。しかしその時期については、疑義が提出されている。若松良一は、より新しい時期の争乱と考えた。埼玉古墳群は、6世紀末頃から近在の古墳が本古墳の規模を凌駕する。つまり、本系の將軍山古墳に対して、近在の真名板高山古墳・栢山天王山塚古墳などが出現するのである。これは「武蔵国造と拮抗しうる勢力の登場として評価しうる」(若松1987)とした。そして屯倉設置を欽明・推古期とする原島説を採用して、この事象と合致するとしている。滝沢規朗も同様な見解である(滝沢1992)。

一方、原島礼二や雨宮龍太郎は、より古い時期の争乱と考えた。原島は上野東部と南武蔵で5世紀後半に大型古墳が衰退するが、これを争乱の結果と考えた。つまり「事実は五世紀の後半におきた事件を、安閑期の物語のひとつの素材にした」(原島1987)とした。また雨宮は、比企丘陵北部を小杵、同南部を使主の領域とし、争乱に勝利して埼玉に居と墳墓を移したとした(雨宮2006)。つまりこの争乱を5世紀後半の埼玉古墳群出現の契機と捉えた。

(2) 内 容

津田左右吉が「氏族制度時代に於いてかういふ紛争を朝廷で裁断せられてとは信じ難い」(津田1955)と指摘して以来、文献史学家を中心にしてこの事件の信憑性に疑義を示す研究者は多い。その理由は、武蔵国・国造制・屯倉が該期には成立ないし設置されていないというのが論旨である(原島1979)。それに対し考古学関係者は、一定の史実として理解している傾向にある。

○武蔵国(无邪志国)の成立

渡辺貞幸は、該期に「武蔵国」が成立していたのかが証明できない(渡辺1978)という。飯塚卓二は、5世紀代において北武蔵は毛野地域政権の政治圏に属する(飯塚1988)とした⁽⁵⁾。しかし国造本紀には、成務天皇期に「无邪志国造・胸刺国造・知知夫国造」が記載されている。安閑期(第28

代) よりも遙かに遡る第13代期に「ムサシ」が記載であることは意識して良い。なお、胸刺国造は无邪志国造の註を誤記したものである(太田1963) という見解を容認できるとすれば、无邪志国は、武藏国の秩父郡を除く領域を无邪志国造が治めた⁽⁶⁾ ということになる。

また尾崎喜左雄によれば、関東地方は第1段階として「けぬ・むさ・ひた・ふさ」の4国に分かれていたという。第2段階になると各國は、上下に分国された。例えば「けぬ」は「かみつけぬ・しもつけぬ」、「むさ」は「むさかみ・むさしも」と呼ばれるようになった。第3段階の「国造の国」期には、「かみつけぬ」は上毛野、「しもつけぬ」は下毛野⁽⁷⁾と記された。また、「むさかみ」は「さがみ」と呼ばれ師長・相武、更に「むさしも」は「むさし」と呼ばれ无邪志・知々夫に分国された。第4段階の「国司の国」期には、上野・下野・武藏・相模・常陸・上総・下総などの国が成立する(尾崎1970)とした。注意したいのは第2段階、「むさかみ・むさしも」の「かみ」と「しも」である。この「上下の分轄は近畿地方の文化や勢力の影響に定められた」(尾崎1972)ものである。つまり、自然発生的な「クニ」ではなく、ヤマト政権の行政区画としての「国」の存在を窺わせる。つまり、古墳時代の比較的早い段階に「无邪志国」は成立していたと見たい。

該期における武藏国(無邪志国)の成立に疑問を呈する見解があることは承知している。勿論「国」の概念規定にもよるが、それでは魏志倭人伝に記された邪馬台国や北九州の国々の存在も認めないのであろうか。これについては、魏の役人が記した表現であることは言うまでもないことではある。

○国造制の成立

関東地方では、6世紀代に大型前方後円墳が築造される。この理由について白石太一郎は「後期大型前方後円墳の被葬者は、領域支配者としての地域首長であるとともに、畿内王権がこの地域に数多く設置した名代・子代などの部や舎人の現地管掌者としての性格を合わせもつ」(白石1992)と捉えた。そして熊谷公男は、「近年では、国造制の成立は、六世紀前半と見るのが通説になりつつある」とし、5世紀代の江田船山古墳の无利豆や稻荷山古墳の乎獲居に官名が記されていないのは、該期には未だ「地方官自体が、まだ設けられていなかった」(熊谷2001)とした。それでも「典曹人」・「杖刀人」の存在は、「伴造制度につながる豪族による世襲的な職務の分担制度(人制)の存在を指摘できる」(仁藤2004)としている。

更に、魏志倭人伝を想起していただきたい。卑弥呼は、伊都国に一大率を派遣し、北九州沿岸地域の諸国を検察させている。諸国には主官と副官が存在している。主官は、国造に通じる国の統治者である。名称の統一性に欠けるのは、諸国王を採用しているため(宮本1989)であろう。しかし、副官：卑奴母離⁽⁸⁾は、邪馬台国が派遣した辺境防備隊であり、名称も統一されている。確かに、主官は邪馬台国から派遣された行政官ではないかも知れないが、これは旧国造も同じである。また副官は、防備隊の兵員を動員できた役人として、大きな力を有していたことが想像される。

つまり、武藏国造争乱の300年前の邪馬台国の統治形態を勘案すれば、武藏国(無邪志国)の成立や国造制に類する統治方法は確立していたと考えられる。

○屯倉の設置

原島礼二は、推古朝のこととしている。金井塚良一は、横渟屯倉を管掌したのは壬生吉志であり、それは胴張りのある横穴式石室をもつ古墳の存在に顕現していると考えた(金井塚1978)。つまり原島説と同じ600年前後の事であり、国造争乱とは無縁と考えた。屯倉の管掌に壬生氏が関わっていたとしても何故該期に横渟屯倉が設定されたのか、他の三処の屯倉も含めてその理由が明らかでない。

近年、屯倉の設置時期は、早まって捉えられるようになっている。館野和己は、磐井の乱後に設置された糟屋屯倉が最古（6世紀前半）の例と捉える（館野2004）。

武藏国・国造制・屯倉の成立について検討したが、該期にこれらの制度が成立していたか否かではなく、実態として存在していたか否かである。館野和己によれば、「国造制や部民制は五世紀末ないし六世紀以降に開始されたものであった。したがってそれに伴うミヤケの設置も、その頃から本格化した」とし、さらに「五世紀代の大型の倉庫群が、ミヤケの先駆的形態であった可能性ある」（館野2004）と指摘している。

4 稲荷山古墳と杖刀人首

(1) 稲荷山古墳の故地

稻荷山古墳は、北武藏の地に突如出現すると捉えられている。その出自を明らかにすることは、埼玉古墳群の性格を語る必須の要件である⁽⁹⁾。

稻荷山古墳の故地について増田逸郎は「長方形周溝⁽¹⁰⁾・南北主軸・埴輪・比企型壙の分布などの諸事象を加味すれば、その本貫地を比企に求めることができる」とした。しかし前三者は、比企の特徴とは言い切れない。更に雷電山古墳を乎獲居の祖父半弓比の墓に比定した（増田1999）。更に稻荷山古墳の追葬者の埋葬主体は、礫櫛や粘土櫛などの在地性の施設であることから、少なくとも畿内豪族ではないだろうとした。また雨宮龍太郎は、比企丘陵北部を小杵、同南部を使主の領域とし、争乱に勝利して埼玉の地に居を移したとした。両者は、何れも稻荷山古墳の故地を比企地方に求めた。

金井塚良一も同様に比企説である。氏は、野本將軍塚古墳を5世紀第3四半期とし、埼玉稻荷山古墳の直前に位置づけた。本古墳は①後円部に比して前方部が低い。②埴輪が存在しない。③埋葬施設が粘土櫛か礫櫛の可能性がある④台地の縁辺に立地しているなどの特徴を有している。主に①・②は4世紀代、③・④は4・5世紀代の特徴である。つまり、本古墳は4世紀代の可能性が高い。

金井塚氏の主張を紹介しておこう。まず①については、土取りの結果あるとした。本来は前方部の高さは4m程高くなり、墳長もより長くなるという。しかし前方部の表土を剥ぐように土取りするとは考えられない。また、地形的な制約から前方部先端も土取りされたとも考えられない。つまり現存墳形は、大幅な改変を受けていないと見たい。甘粕健も同様な見解である（甘粕1976）。②について氏は最も腐心した。埴輪が存在しない理由については、埴輪を施設するのが慣習になっている時期にも係わらず、太田鶴山古墳のように埴輪を持たない大型前方後円墳が存在することから、本古墳の5世紀代説を否定する根拠にはならないとした（金井塚2008）。しかし、太田鶴山古墳は例外中の例外であり野本將軍塚古墳も同様であるという保証は全くない。③については、ボーリング調査によって得られた所見であるので恐らく事実であろうが、時期決定の根拠にはならない。④については、5世紀代の特徴とも言える。何故なら4世紀代の古墳は、低地を見下ろすような台地の先端に位置するからである。しかし総体的に見るならば、4世紀代と見るべきであり、稻荷山古墳の前史を飾る古墳とは成り得ないだろう。同古墳の故地を比企地方に求めるのは、無理があるかも知れない⁽¹¹⁾。

それでは、稻荷山古墳の故地を何処に求めればよいのであろうか。注目したいのは、稻荷山古墳

を擁する埼玉古墳群周辺の荒川左岸地域である。同地域には、稻荷山古墳と同時期と考えられる熊谷市横塚山古墳・同鎧塚古墳・行田市とやま古墳・同大日塚古墳・同大稻荷1号墳・鴻巣市新屋敷60号墳がある。これらの古墳の中には、稻荷山古墳に先行する古墳が存在する可能性もある。また、埼玉古墳群の各古墳に継続的に採用された二重周壕を有する熊谷市女塚古墳（寺社下1983）の存在が注目される。更に県北部の大里郡は、児玉郡と同様に県内各地に先駆けて5世紀第3四半期に竈を導入した多くの集落が存在する地域でもある。これらの先進文化を取り入れた集落の生産性を背景にして稻荷山古墳は、出現したものと理解したい。

ところで、各地域に展開している大型古墳は、それぞれの地域で突然出現したかのように見える。その背景には、政治的要因が関わるのか、あるいは自然的発展に起因するのか、それを識別することは難しい。実際には、この両者が関って大型古墳は出現するのであろう。斎藤国夫は稻荷山古墳出現の背景について「埼玉周辺の在地勢力が、畿内政権と結びつくことにより、急速に強化した」（斎藤1984）とし、在地勢力の台頭を一義的な要因だと想定している。本稿でも、斎藤説を支持したい。稻荷山古墳は、先述した埼玉古墳群周辺の同期の古墳主に共立されて出現したものと理解したい。

（2）杖刀人首と国造への道

鉄劍銘文によれば、乎獲居臣⁽¹²⁾（稻荷山古墳礫櫛主と仮定）は、杖刀人首として大王を補佐したと記されている。そしてそれは乎獲居のみではなく、「世々」上番していたという。「世々」とは、実在と考えられる先代加差披余、ないしは先々代半豆比の代からであろうか。しかし上番の当初は、杖刀人の一人として出仕していたのであろう。増田逸郎は、条件付きながらも比企の雷電山古墳主を半豆比に比定している（増田1999）が、時期の整合性に問題がある。半豆比の墓を何処に求めるか不明であるが、この頃は未だ杖刀人であろう。しかし、先代の加差披余の墓を稻荷山古墳主とすることことができれば、この時期に杖刀人は「首」となったものと理解したい。

稻荷山古墳出現の背景には、大和王権の毛野政権対策の一環と捉える考えがある。真偽はともかく、これに関連して稻荷山古墳主加差披余は国造に任命⁽¹³⁾された可能性がある。この時、彼の児乎獲居は杖刀人首に昇格したのではないだろうか。

杖刀人首にまで昇格した乎獲居は何故、自らの墳墓を築けなかったのか。それを説明することは難しいが、次の様に想定することはできないだろうか。埼玉古墳群では、大型墳とそれよりも規模の小さい中型墳が存在する。中型墳は、大型墳（盟主墳）を補佐する人物の墓と考えられる。関連する盟主墳と中形墳の組み合わせは諸説がある。その一説を挙げると、二子山古墳と瓦塚古墳、丸墓山古墳と奥の山古墳、鉄砲山古墳と愛宕山古墳、将軍山古墳と中の山古墳となる。つまり稻荷山古墳には、同時期の小円墳は存在するが、中型の前方後円墳は存在しないのである。稻荷山古墳主を補佐した乎獲居は、自らの古墳を築造しないで主墳に追葬されたのである。その後は、副官クラスも自らの古墳を築造するようになったのである。なお、上番者が盟主となったのか、補佐役であったのかは今後の検討課題であるが、後述するように八幡山古墳主との説もある物部兄麻呂は、舍人として上番した後に国造に任命されたようである。

（3）国造家の世襲

『国造本紀』によれば元邪志国造の祖は兄多毛比命であるが、彼が実在するのか本貫地は何処なのかは不明である。大型古墳の動態から見れば、南武藏か比企が有力な候補地となろう。稻荷山古墳

主の国造就任の経緯は不明であるが、その後は埼玉古墳群の盟主墳が国造職を世襲したことが定説化している。

銘文鉄劍製作の約60年後の丸墓山古墳当時の国造は笠原直であった。稻荷山古墳当時に氏姓制度が成立しているとすれば、笠原直であった可能性が高い。とすると、乎獲居臣は、笠原直乎獲居ということになる。

笠原直家の初代武藏国造は稻荷山古墳主であり、二代は二子山古墳主である。そして、三代目をめぐる時期には、稻荷山古墳主近親者も財力を蓄え勢力を有するようになった。こうして使主と小杵の争乱が勃発した。この時期、埼玉古墳群では盟主墳が継続して築造されている。つまり、この争乱に勝利した使主の墓は、本家を継承した人物であり、それは丸墓山古墳と言うことになる。その後、盟主墳である将軍山古墳主、鉄砲山古墳主が国造職を歴任した。しかし6世紀末には、傍系家の埼玉古墳群周辺の真名板高山古墳(栢山天王山塚古墳)、小見真觀寺古墳、八幡山古墳の各古墳主などに国造職が継がれていったようである。

『聖德太子伝暦』によれば、633年に物部連兄麻呂が国造に就任した。兄麻呂は聖徳太子の舍人となって功を上げ国造に任命されたようだ(森田1988)。兄麻呂の墓は、八幡山古墳の被葬者とする説がある。事実だとすれば、争乱後100年を経ても埼玉古墳群の家系は国造職を世襲していることが想像される。

なお、平安初期に足立郡に本貫地を移動した丈部直不破麻呂に至まで、武藏国造家は出雲系氏族という意味で同族が世襲している。

5 使主と小杵の墓

(1) 使主の墓

二子山古墳を使主の墓に比定したのは、甘粕健(甘粕1970)と杉山晋作(1992)である。また、雨宮龍太郎は、「奥の山古墳・鉄砲山古墳・瓦塚古墳のいずれかになる」とした。しかし、それ以前の稻荷山古墳・二子山古墳・丸墓山古墳が巨大であることから、既に「无邪志」は統一されており、「経年」対立していたとは考えられないとした。さらに、使主の墓が縮小しているのは理解できないことから「書紀の紀年は信頼できない」とした。そこでこの争乱を5世紀後半のこととし、これに勝利した使主の墳墓を稻荷山古墳とした(雨宮2006)。また森田悌も稻荷山古墳を使主の墓としている。森田は、争乱記事が遡り稻荷山古墳の築造年代に近づく可能性があることから両者の関連を指摘した(森田2006)。

なお本稿では、武藏国造の墓である埼玉古墳群で争乱記事と時期の一致することから丸墓山古墳を使主の墓と考える。

(2) 小杵の墓

それでは、小杵の墓は何処にあるのだろうか。丸墓山古墳を小杵の墓に比定したのは杉山晋作(杉山1992)と坂本和俊(坂本2001)である。一方、増田逸郎は「丸墓山古墳の被葬者を小杵とする考えは毛頭無い」(増田1991)と否定している。

また、古墳を特定しての比定ではないが、甘粕健は南武藏(甘粕1958)、金井塚良一(金井塚1979)・雨宮龍太郎(雨宮2006)は比企地域、増田逸郎は児玉郡域(増田1991)に小杵の墓を求めている。

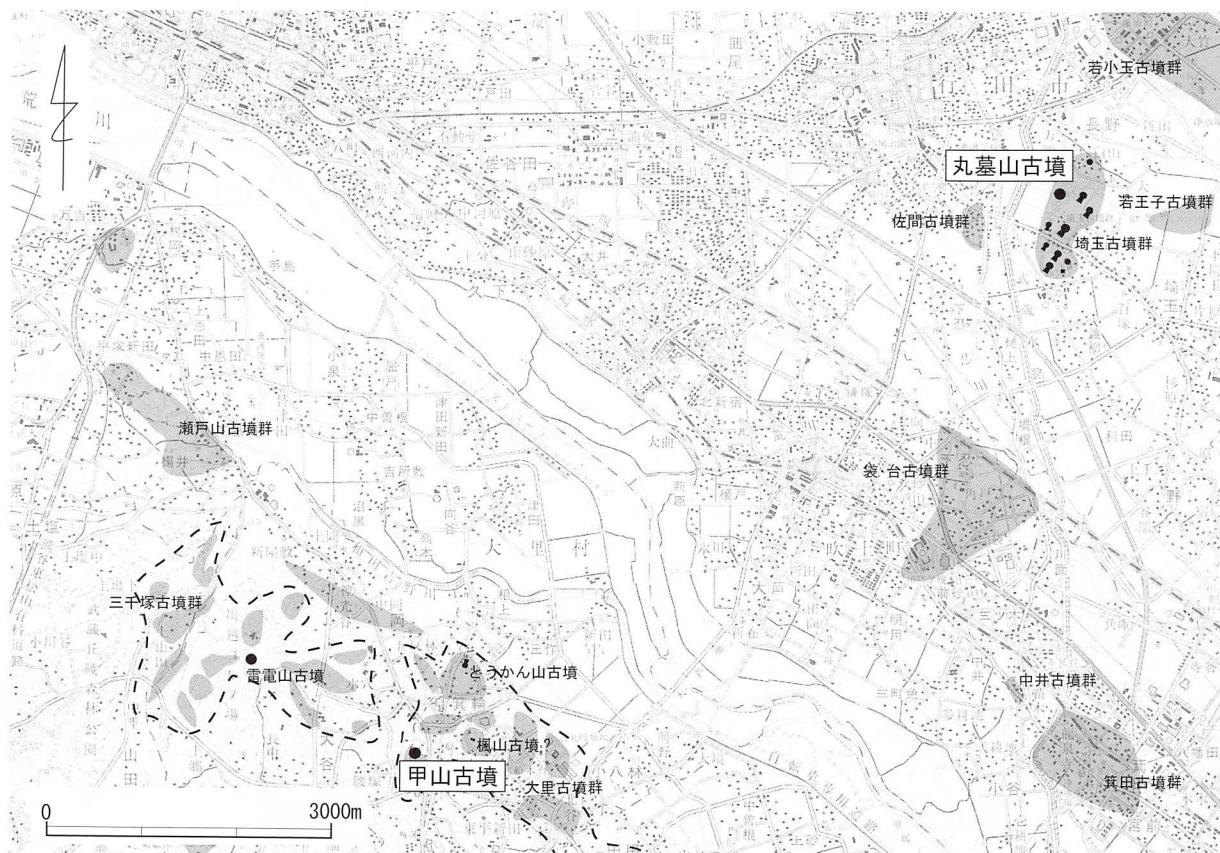
まず埼玉古墳群は、国造職を得た勝者使主一族の墓であることは前提したい。そして、敗者小杵

が国造職を争うまでに成長するには、使主の支配領域とは異なる地域で生産活動を一定の期間行う必要があったと考えられるからである。つまり、仮に使主の墓を丸墓山古墳に比定できるとすれば小杵の墓を埼玉古墳群内の古墳に求めることはできない。

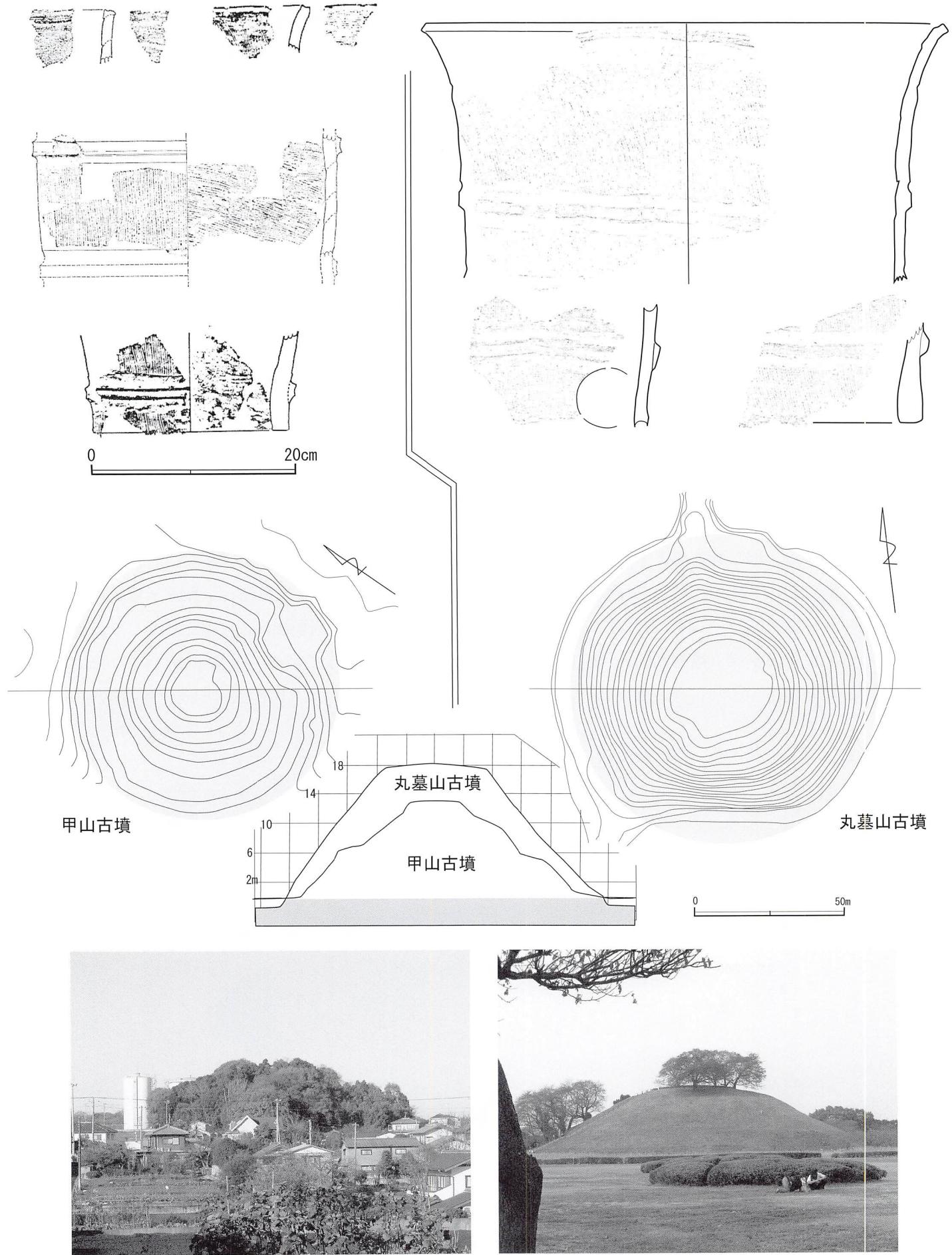
同族である小杵は、埼玉古墳群成立（稻荷山古墳）以降に分家した可能性がある。もちろんそれ以前の分家を否定するものではない。もし稻荷山古墳→二子山古墳→丸墓山古墳の系譜をそれぞれ親子関係にあるとすれば、小杵は稻荷山古墳主の二代後、二子山古墳主の次代の人物となる。丸墓山古墳主使主と同世代の小杵にとって、稻荷山古墳主は祖父、二子山古墳主は親か伯父ということになり、使主とは従兄弟か再従兄弟の関係になる。

次いで小杵は、本宗家からいつ分家したかを検討することにする。分家先は、同族であることから埼玉古墳群周辺（近在）とする。磐井の乱の結末と同様に誅殺された小杵本人やその一族が没落しないとすれば⁽¹⁴⁾、それに見合う盟主墳を有するのは、大里甲山古墳のみである。ここは「横渟屯倉」比定地にも近接している。よって丸墓山古墳の規模にも匹敵する甲山古墳を小杵の墓に比定することにする。小杵の死後もとうかん山古墳（前方後円墳74m）が築造されるなどしており、一族が没落することはなかった。

なお、小杵の分家を一代前（二子山古墳の段階）と考えると、甲山古墳に先行する古墳が存在する可能性がある。その候補は、当古墳と指呼の位置にあり、前方後円墳と思われる楓山古墳⁽¹⁵⁾と東山古墳である。但し両古墳とも今は消滅しており、その真偽を検証することはできない。前者は、『埼玉縣史』に「楓山古墳よりは銅鏡・石製鏡・勾玉・石小刀・鈴環・須恵壺・土製鈴・埴輪馬等を出し」（稻村1951）と紹介されている。塩野博は、出土遺物（鏡・石製模造品・環鈴）から5世紀末から6世紀前半代（塩野2004）、金井塚良一は6世紀前半に比定している（金井塚1979c）。東山



第1図 埼玉丸墓山古墳と大里甲山古墳



第2図 甲山古墳と丸墓山古墳

古墳については、全く不明である。

小杵がその経済基盤を充実した背景には、三千塚古墳群を造墓した集団の協力があったと考えたい。三千塚古墳群は5世紀前半の雷電山古墳を祖とするが、古墳群が展開するのは6世紀以降であり、その間の古墳は確認されていない。しかし、増田逸郎が想定するように雷電山古墳主を埼玉稻荷山古墳礫槨埋葬者乎獲居の祖父半豆比である（増田1999）かは別として同族であるとすると、小杵は祖先の地に戻って勢力を蓄えていったのかも知れない。

なお若松良一は、甲山古墳を「武藏国造と霸権を争った小杵の墳墓に補することができるであろうか」と自問した。そして、筑紫君磐井の墓である岩戸山古墳に見るよう「武藏国造家と霸権を争った有力首長の墳墓は、前方後円墳の被葬者以外に考えられない」とし、甲山古墳小杵墳墓説を退けた。

本稿では①同族であることから埼玉古墳と至近距離にあること。②横渟屯倉と近接すること。③最大級の円墳の背景には尋常でない事情が有りそうなことなどから本古墳を小杵の墓と推定する。この小杵の反乱は、三千塚古墳群を中心とした比企勢力を後ろ盾にして国造職奪取を目的とした比企の失地回復を目途したものである。

このように争乱の敗者となった三千塚古墳群の集団は、屯倉の設置によって埼玉古墳群を牽制する役割を負うことになる。それと同時にこのような状態の中で甘粕健は矛盾することなく「三千塚の集団は埼玉の大首長に従属し、その軍事力の基盤をなした集団」（甘粕1976）と捉えた。

6 丸墓山古墳と甲山古墳は、なぜ円墳か

前方後円墳は、盟主墳として認識されていた墳形である⁽¹⁶⁾。その他の墳形は、陪塚に見るようにその下位に位置づけられることは間違いないであろう。しかし、陪塚には前方後円墳も存在する。しかしこれは「盟主墳」ではない。陪塚は円墳であることが多いが、大王墓の場合は方墳が採用される確立が高い。

帆立貝式古墳出現の背景について、小野山節は『畿内王権』の規制と捉えた（小野山1970）。つまり、大王権力が強大な時には、地方豪族は前方後円墳築造を許可されず、他の墳形にせざるを得なかつたとした⁽¹⁷⁾。甘粕健は、これを「有力な地域政権」とその下位との関係でも成立するとした。さらに「畿内およびその周辺の地域で、首長墓が前方後円墳から帆立貝式前方後円墳に変わるのは、その首長が王権に対し、大王陵の陪塚に埋葬された大王周辺の近従的小首長と同一視されるような緊密な従属関係を結ぶにいたつたためであろう」（甘粕1976）とした。つまり、従属の証として帆立貝式古墳は築造されと考えた。円墳や方墳も同様な意図で築造されたのであろう。

なお、北九州や北陸などでは、円墳が盟主墳であることが多い。これは、これらの地域が大陸・半島に近いために、その地域の盟主墳を模したと捉えられている（森1990）。

(1) 丸墓山古墳

円墳である理由について吉川國男は、『日本書紀』雄略天皇十一年冬十月条の鳥養部の設置説話と関連づけて捉えた。つまり、武藏国直丁らは「今天皇由一鳥之故而鯨人面」した事を「惡行之主」と非難したが、それが天皇の知ることとなった。そのために武藏直丁はペナルティーを受け、丸墓山古墳は円墳とならざるを得なかったと指摘した（吉川1988）。

坂本和俊は、この時期最大の古墳である今城塚古墳の後円部径が100mであり、それより大きな「円

墳を築く行為は、畿内政権の最高首長墓級の前方後円墳造る意志表示であり、畿内政権に対する反乱行為として受取られたのであろう」とし、「丸墓山古墳の建築者は、埼玉政権における首長の座を畿内政権から剥奪され」た結果、円墳とせざるを得なかつたとした（坂本1996）。小杵の墓ということである。

また系譜について増田逸郎は、「五世紀代の大円墳群を存在する児玉郡域と関連づけるのが妥当のように思える」（増田1991）とした。坂本和俊も同様に丸墓山古墳は「群馬県地域の技術協力を得て築いた」（坂本1996）と捉えていたが、その後「群馬県や児玉郡周辺では、丸墓山古墳の時期から横穴式石室が導入されており、その地域との関係が希薄であったことが伺われる」（坂本1998）と修正している。坂本の指摘とおり埼玉古墳群では、稻荷山古墳・二子山古墳という巨大前方後円墳築造後の円墳丸墓山古墳であり、その関連性を求めるには無理がある。

(2) 甲山古墳

若松良一は、甲山古墳が円墳である理由を「柏崎・古凍古墳群内に比企の大首長墓が円墳として造営されていた6世紀前葉から中葉の延長線上に有る者」の墓と捉え、更にそれは「武藏国造による造墓規制下にあったと推定される」とした。そして巨大古墳を築造できたのは、吉利根川の治水に成功を治めたためとした（若松1987）。

円墳に造り出しを設けた古墳を帆立貝式古墳という。造り出しは祭祀空間と考えられている。日本最大の帆立貝式古墳は、宮崎県男狭穗塚古墳であり、円丘径は132mを計る。そういう意味では、丸墓山古墳は、日本最大の円墳とは形容しがたいかも知れない。何れにしろ、本稿で取り上げた二古墳が造り出しを持たない円墳であるのは興味ある問題である。

ま　と　め

本稿の主旨は、単純である。武藏国造争乱を史実と見たのである。そして、そこに登場する人物の墓を想定したのである。武藏国造家の墓を埼玉古墳群に求めることができるのであれば、争乱に勝利した使主の墓は、本古墳群中に存在することになる。争乱記事と時期が近接するのは、丸墓山古墳である。そして、敗者小杵の墓は、献上した横渟屯倉に近接する巨大円墳の甲山古墳に比定したのである。ただ、それだけである。

しかし、解決しなければ成らない問題がある。それは、なぜ円墳なのかと言うことである。本来、使主も先祖と同様に前方後円墳に葬られるべき首長であったのであろう。それが適わなかつたのは、この争乱が起因しているように思われてならない。ところで争乱時に、彼の墓はどのような状態であったのであろうか。寿稜であるとしても完成には至つていなかつたのだろうか。あの磐井が前方後円墳主に成り得たのは、戦死以前に墳丘が完成していたのがその理由かも知れない。あるいは死後に墳丘を完成させたとすると、死後でも一族の意志が尊重される状況であったことになる。

使主と小杵は共に前方後円墳を目指して築造を開始していた。先ずは、円丘部からである。争乱時には墳丘築造どころではなかつたが、終結後には築造は再開される。しかしこの時は既に磐井の時とは異なり朝廷の意志が及ぶようになつたのであろうか。小杵は懲罰として墳形を円墳にしなければならなかつたのであろう。そして、更に朝廷が気を遣つたのが上毛野君小熊である。朝廷は、小熊の立場に一定の配慮をして勝者使主の墓までも前方後円墳の築造を許さなかつたのかも知れない。あるいは服従の証として自ら前方後円墳の採用を放棄したこととも考えられる。

武藏国造の争乱が発生した7年前、北九州に独立戦争（山尾1985）が勃発した。筑紫君「磐井の乱」である。磐井は、朝廷が半島に6万の兵を侵攻させようとしたのを阻止したのである。筑紫軍は火や豊の国の援軍を得て、朝廷軍との間に大規模な戦争を展開した。約1年4ヶ月に及ぶ戦闘の末、磐井は戦死する。全長130mを誇る前方後円墳岩戸山古墳の主の最後である。その息子葛子によって糟屋屯倉が献上され反乱は一応終結するが、その後も屯倉は献上され続けた。しかし磐井の墓は破壊されることもなく、嫡子も抹殺されることはない。磐井一族の墓は、その後も築造され続ける⁽¹⁸⁾。朝廷は、屯倉の獲得によって財政基盤の確保と支配の強化ができればそれで良かったのである。

ところで、上野君小熊は小杵が応援を求めてきた時、また朝廷は使主が謁見を求めてきた時、それぞれどのような心情であったのであろうか。小熊は、7年前の「磐井の乱」の結末を知っていたであろう。東国で絶大な権力を有していた小熊は、小杵と謀り上毛野・武藏連合の政権を目指したのであろうか。それとも、磐井の運命に我が身を重ねたのだろうか。一方、吉備や筑紫の反乱に勝利した朝廷は、西日本を支配下に組み込み自信を有していたに違いない。使主の謁見は、東国支配を目論んでいた朝廷には渡りに船だったのであろう。

なお、墓制に直接的な政治関係を求めるることはできないことを確認しておきたい。それでも古墳の墳形・規模・副葬品などは、多分に政治的関係が反映されているのも事実であろう。日本最大の古墳は、「大王」の墓であろう。各地域最大の古墳は、「国造クラス」の墓であろう。大山古墳と墳形が似ている古墳は、それとの関連が想定されよう。同範型鏡を出土する古墳は、互いに何らかの関係を有するのであろう。都出比呂志は、墳形の違いを江戸時代の大名に擬して前方後円墳は譜代大名、円墳は外様大名のようなものと便宜的に説明している。しかし、墓は文化遺産であり、精神文化の産物であり、政治的な産物ではない。墳形も規模も畿内政権の絶対的な規制を受けているとは考えられない。基本的には、造墓者の主体的な意志が反映されているものと理解したい。墳形⁽¹⁹⁾は祭祀や死生観と同じとするものであり、規模は金持ちが豪邸、庶民が「ウサギ小屋」に住むのと同じようなものである。造墓者は、財力の許す範囲内で可能な限り大きな古墳を築造したのである。地方豪族が畿内王権よりも大きな古墳を築けなかったのは、財力が相対的に無かったからである。なおこの古墳は、某天皇陵と同型だからその影響を受けていると説明されることがある。その様なこともあるかも知れないが、その墳形はその時代の流行であり、政治的意味合いのみでそれが決められる訳ではない。

おわりに

埼玉古墳群には4大特徴がある。それは①特異な長方形周壕を二重に配した兆域の大きな盟主墳が数代に亘り近接して築造された古墳群、②稻荷山古墳出土の115文字を刻した国宝辛亥銘鉄劍、③將軍山古墳出土の馬鎧・旗差物などの遺物群、④日本最大の円墳：丸墓山古墳の存在であろう。そして更に付け加えるならば、武藏国造争乱を記した『日本書紀』の117文字の記事がある。そして鉄劍銘文には実在の人物と考えられる乎獲居・加差披余・半豆比、『日本書紀』には使主・小杵が登場する。彼らは何れも古墳の築造が想定される人物である。私は、可能であるならば、彼らの墓を特定してあげたい。これが本稿執筆の動機である。

そして、もう一つの理由がある。当館に着任し、丸墓山古墳が日本最大の円墳であることを知つ

た。東国、この埼玉古墳群になぜこのような古墳が存在するのであろうか。日本最大の円墳は、國宝鉄剣にも匹敵するほど重要な事象である。鉄剣については百家争鳴であるが、丸墓山古墳については、積極的に取り上げられることが少ないようと思われる。当館職員として、日本最大の円墳が存在する理由を説明する必要があった。そこで思い立ったのが武藏国造争乱との関係である。

この思いを畏友利根川章彦氏に伝えた。しかし納得してもらうことはできなかった。氏はこの争乱が虚構であることを主張していた。私の思い込みは、益々強くなつた。そして氏に数々の質問を浴びせ、数々の文献の紹介をお願いした。氏は、あらゆる情報を提供してくれた。本稿を成稿できたのは、氏のおかげである。また、沼野勉・堀内紀明の両氏にも資料の提供やご教示を受けた。併せてお礼申し上げる次第である。

《註》

- (1) 古墳の時期判定は難しい。『筑紫国風土記』に「生平之時 預造此墓」とあるように特に大形古墳は、寿陵であることがわかる。仮に墳丘や石室の完成まで5年を要したとしよう。しかし墓主が健在なら、そのままの状態で留め置かれた事になる。埴輪は、どの時点で樹立されたのだろうか。墳丘などの完成時、それとも埋葬時なのであろうか。破損した埴輪が存在した場合、追葬時など、再樹立することも考えておかなければならない。また追葬毎に祭祀は行われたことであろうし、既埋葬者についても一定期間毎の祭祀は行われたことが予想される。何れにしろ、特に墳丘外の遺物で年代を確定することは危険が伴う。そのため古墳の時期は、点で決められるものではない。
- (2) 二子山古墳では、多くの場所で壕底に接して所謂FAと思われる「白色粘土・青白色粘土・灰色粘土・粘土質黒色腐蝕粘土」が堆積している。但し、昭和55年度西A調査区では、周堤立ち上がり箇所に所謂三角堆積があり、これを覆って所謂FA層が認められる(杉崎1988)。つまり、本古墳はFA直前に築造された古墳であることがわかる。
- (3) 上記3書については、塩野博が紹介している『埼玉の古墳 大里』(塩野2004)から引用である。
- (4) 雨宮龍太郎によれば東国では、北の上毛野君を中心とする上・下毛野連合と南の大和王権に協力的な南関東首長層との敵対関係が潜在的に存在しており、この武藏国造争乱もその延長線上で考えるべきであると主張する。
- (5) 飯塚は、「武藏（无邪志・胸刺）という概念成立以前の北武藏は、所謂毛野の一角であり、5世紀前半代の北武藏に存在する円墳や帆立貝型古墳の被葬者は、官僚的性格を極めた毛野地域政権の構成員ではなかつたろうか」そして「同様なことは、5世紀後葉から6世紀前半代についても言えよう」(飯塚1988)とした。ムサシ国 の成立を遅く考えている。
- (6) 无邪志国造と胸刺国造の二者を認める説がある。尾崎喜左雄は无邪志国を多摩川流域、胸刺国を荒川沿岸に比定した(尾崎1972)。雨宮龍太郎は无邪志国を武藏国北部(埼玉古墳群など)、胸刺国を荒川下流右岸一帯と考えた(雨宮2006)。なお、川崎市影向寺から「无射志国荏原評」と刻された7世紀後半の平瓦が出土していることから、南武藏も「无邪志国」である可能性がある。
- (7) 『日本書紀』崇神紀に「以豊城命令治東、是上毛野君・下毛野君之始祖也」とある。『国造本紀』下毛野国造条「難波高穴(津)御世、元毛野国分為上下」とある。つまり、仁徳期以前に毛野国は成立していたことになる。
- (8) 卑奴母離が派遣されたのは、邪馬台国の「北」に位置する6ヶ国のうち対馬国・一支国・奴国・不彌国の4ヶ国である。一大率の置かれたである伊都国や邪馬台国に近い投馬国には派遣されていない。卑奴母離は、邪馬台国が派遣した辺境防備官であることは間違いない(山尾1972)。
- (9) 埼玉古墳群の出現は、南武藏との政権交代(甘粕1970)、あるいは長方形周壕との関連から房総地域(坂本1998)へ比企地域(増田1999)との関連が指摘されたこともある。
- (10) 比企地域は、当初前方後方墳を盟主墳の墳形に採択した地域である。この墳形の周壕は、長方形を呈する事

からこの型の周壕を採用した稻荷山古墳の故地とした。

- (11) 上述した以外にも須恵器を採取したことを挙げているが、現在ではその所在が不明であり検証できない。なお野本將軍塚古墳には、二重の長方形周壕らしき痕跡が見える。これは後世の遺構である可能性が指摘されている(金井塚1979)。しかし、長方形周壕は埼玉古墳群の大きな特徴であり、これが事実だとすれば両者の類縁関係を想定することができる。
- (12) 乎獲居臣の氏姓を持たない2代前までを実在と見るのが通説となっている。なお乎獲居臣の「臣」は、謙称で臣下を意味する(岸ほか1979)。なお、礎櫛の被葬者乎獲居臣を稻荷山古墳主の子と仮定すると、同古墳主は加差披余となる。加差披余は、笠原に繋がる。そして安閑期には、笠原直を氏姓とし使主や小杵が歴史に名を残すことになった。
- (13) 若松良一は、乎獲居臣を中央豪族と考え、武官として勤めた後に武藏国に派遣されて在地豪族化したとした。そして、該期をもって国造制が成立したと捉えた(若松1987)。しかし、初代武藏国兄多毛比を実在の人物と仮定するとより古くなる可能性がある。
- (14) 古墳群の消長は、争乱の勝者と敗者の関連とは別次元の展開をする。筑紫の君磐井に見るよう被葬者が朝廷の反逆者であっても、その墓を破壊することは無かった。墓は、政治的産物ではないのである。
- (15) 楓山古墳は、10m前後の円丘が残存している。西側に低い高まりが認められる。これが、前方部とすれば前方後円墳となるが確証はない。なお、これを認めるにしても墳長は30~40m程度であろう。
- (16) 小野山節は「権力者は対等に対立するものを許さない」というが、ある程度の規制・規範はあったにしても墳形・規格・規模の選択は、財力の許す範囲内で築造できたと考えたい。またそれが下賜された副葬品であったとしても、権力誇示のアイテムにはならないであろう。
- (17) 小野山節によれば大王権力が強大な時、それは大豪族が失脚した時期と捉えた。しかし大王にとって、それを補佐する豪族の失脚は痛手であったのではあるまいか。このような前方後円墳築造の規制は、5回行われたという。第1回目は5世紀前、2回目は5世紀後半で葛城氏、3回目は6世紀中葉で大伴氏、4回目が6世紀末~7世紀初頭で物部氏、5回目が7世紀中葉(薄葬令)の蘇我氏である。しかし、該期に帆立貝式古墳が構築されているかは、再度検討されなければならない。
- (18) 屯倉の設置時期はともかくとして、磐井の乱の史実性を疑う研究者は少ない。何故、武藏国造争乱には、疑惑がもたれるのであろうか。ところで、坂本和俊は、丸墓山古墳の「築造開始が、FA降下直前後(直後の誤りか)とすれば、安閑期の内容には、かなりの信憑性があることになる」とし、「丸墓山古墳の築造が争乱の発端であり、その後、愛宕山古墳などの中型前方後円墳が築造されるようになるのは、争乱を経て埼玉政権内部の組織が整備されたからであろう」(坂本1996)とした。
- (19) 例えは墳丘を三段で築成することに何らかの意味を想定して種々論じられる。しかし段築造は、墳丘の崩壊防止のための土木工学的な技術要請に基づくものである。と同時に、墳丘構築及び埴輪施設や石敷き作業のためのものである。

《参考文献》

- あ 青木 豊昭 1992 「越前」『前方後円墳集成 中部編』
甘粕 健 1958 「第三章 古墳時代」『横浜市史』第1巻 横浜市
甘粕 健 1970 「武藏国造の反乱」『古代の日本7 関東』角川書店
甘粕 健 1976 「三千塚古墳群に関する覚え書」『北武藏考古学資料図鑑』校倉書房
甘粕 健 1995 「『武藏国造の反乱』再検討」『武藏国造の乱』大田区立郷土資料館
雨宮龍太郎 2006 「无邪志国造と埼玉古墳群」『埼玉の考古学II』埼玉考古学会 六一書房
飯塚 卓二 1986 「埼玉古墳群の出現と毛野政権」『研究紀要』3 群馬県埋蔵文化財調査事業団
石野 博信 1985 「反乱伝承と古墳(2)」『季刊考古学』第12号 雄山閣
稲村 坦元 1951 『埼玉縣史』第1巻先史原始時代 埼玉縣
宇治市教育委員会 1995 『繼体王朝の謎(うばわれた王権)』河出書房新社
今井 執 1982 『シンポジウム古代東国と大和政権』新人物往来社
岩崎 卓也 1990 『古墳の時代』歴史新書46 教育社

- 江口 尚史 1986 「雷電山古墳」『埼玉県古式古墳調査報告書』埼玉県史編さん室
- 太田 亮 1963 『姓氏家系大辞典』第三巻 角川書店
- 大田区立郷土博物館 1995 『武藏国造の乱—考古学で読む『日本書紀』—』東京美術
- 岡本 健一 1997 「確認調査のまとめ」『將軍山古墳』埼玉県教育委員会
- 尾崎喜左雄 1970 「あづまの国」『古代の日本7 関東』角川書店
- 尾崎喜左雄 1972 「東国の国造」坂本太郎博士古希記念会編『続日本古代史論集』上巻 吉川弘文館
- 小野山 節 1970 「五世紀における古墳の規制」『考古学研究』第16巻第3号 考古学研究会
- か 金井塚良一 1978 『吉見町史』上巻 吉見町
- 金井塚良一 1979 a 「野本將軍塚古墳の謎—武藏国造の争乱と北武藏最大の前方後円墳の築造時期—」『歴史読本』一九七九年五月号
- 金井塚良一 1979 b 「稻荷山古墳と武藏国造の争乱」『歴史と人物』中央公論社
- 金井塚良一 1979 c 「比企地方の前方後円墳—北武藏の前方後円墳の研究(1)ー」『紀要』第1号 埼玉県立歴史資料館
- 金井塚良一 1980 「埼玉古墳群の形成」『古代東国史の研究』埼玉新聞社
- 金井塚良一他 1982 『シンポジウム古代東国と大和政権』新人物往来社
- 金井塚良一 1985 『東松山市の歴史』上巻 東松山市
- 金井塚良一 1990 『大里村史』通史編 大里村
- 金井塚良一 2008 『馬賀の来た道—古代東国研究の新視点—』吉川弘文館
- 岸 俊男・田中 稔・狩野 久 1979 『稻荷山古墳出土鉄劍金象嵌銘概報』埼玉県教育委員会
- 熊谷 公男 2001 『大王から天皇へ』日本の歴史03 講談社
- さ 斎藤 国夫 1984 「埼玉古墳群をめぐる諸問題」『原始古代社会研究』6
- 坂本 和俊 1986 「雷電山古墳」『埼玉県古式古墳調査報告書』埼玉県史編さん室
- 坂本 和俊 1996 「埼玉古墳群と无邪志国造」『群馬考古学手帳6』群馬土器観会
- 坂本 和俊 1998 「考古学から見た稻荷山古墳の出自」『稻荷山古墳の鉄劍研究20年の成果と課題』 大東文化大学エクステンションセンター
- 坂本 和俊 2001 「考古学からみた稻荷山古墳の出自」『稻荷山古墳を見直す』学生社
- 塙野 博 2004 『埼玉の古墳〔大里〕』さきたま出版会
- 篠川 賢 1992 「『国造本紀』の国造系譜」『国立歴史民俗博物館』研究報告第44集 国立歴史民俗博物館
- 白石太一郎 1992 「関東の後期大型前方後円墳」『国立歴史民俗博物館』研究報告第44集 国立歴史民俗博物館
- 城倉 正祥 2009 『埴輪生産と地域社会』学生社
- 杉崎 茂樹 1986 『瓦塚古墳』埼玉古墳群発掘調査報告書 第四集 埼玉県教育委員会
- 杉崎 茂樹 1988 『丸墓山古墳・埼玉1~7号墳・將軍山古墳』埼玉古墳群発掘調査報告書 第六集 埼玉県教育委員会
- 杉崎 茂樹 1991 「古墳時代の北武藏における有力首長層の動態」『古代探叢III』早稲田大学出版部
- 杉崎 茂樹 1992 「武藏における古墳時代後・終末期の諸様相」『国立歴史民俗博物館研究報告』第四四集 国立歴史博物館
- 清水 久夫 1995 「『武藏国造の乱』への招待」『武藏国造の乱—考古学で読む『日本書紀』—』東京美術
- 杉山 晋作 1992 「有銘鉄劍にみる東国豪族とヤマト政権」『新版 古代の日本⑧関東』角川書店
- 閑 和彦 1995 「『武藏国造』と多摩」『月刊 歴史手帖』第23巻第10号 名著出版
- た 高橋 一夫 2005 「鉄劍銘一一五文字の謎に迫る」シリーズ「遺跡を学ぶ」16 新泉社
- 滝沢 規朗 1992 「武藏における首長墓の変遷」『東京考古』10 東京考古談話会
- 館野 和己 2004 「ヤマト王権の列島支配」『日本史講座第1巻 東アジアにおける国家の形成』 東京大学出版会
- 田中 広明 1994 「『国造』の経済圏と流通」『古代東国の民衆と社会』古代王権と交流 2

- 田中 正夫 1994 「古墳から検出された火山灰と埼玉古墳群」『新屋敷遺跡（A区）』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第140集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 津田左右吉 1950 『日本古典の研究』下
- 利根川章彦 2003 「『武藏国造の乱』はあったのか」調査研究報告第16号 埼玉県立さきたま資料館
- な 長井 正欣 2003 「群馬県内の帆立貝式古墳」『帆立貝式古墳を考える』かみつけの里博物館
- 中村 倉司 1999 『岡部条里・戸森前』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第217集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 西嶋 定生 1961 「古墳と大和政権」『岡山史学』第10号
- 西嶋定生編 1964 『日本国家の起源』現代のエスプリ第1巻第6号
- 仁藤 敦史 2004 「ヤマト王権の成立」『日本史講座第1巻 東アジアにおける国家の形成』東京大学出版会
- 沼野 勉 1980 「七 武藏国造の争乱」『鉄剣を出した国』学生社
- は 橋本 博文 1987 「関東地方の埴輪」『季刊考古学』第20号 雄山閣
- 原島 礼二 1977 「考古資料と文献資料」『地方史と考古学』柏書房
- 原島 礼二 1979 『古代の王者と国造』歴史新書16 教育社
- 原島 礼二 1987 『新編埼玉県史 通史編1 原始・古代』埼玉県
- 樋口 吉文 2009 『平成21年度秋季特別展 仁徳陵古墳築造 一百舌鳥・古市の古墳群からさぐるー』堺市博物館
- 福田 健司 1995 「武藏国における古墳時代の問題点—武藏国造の反乱—」『月刊 歴史手帖』第23巻第10号 名著出版
- ま 増田 逸郎 1982 「辛亥銘鉄劍出土古墳の概要と埼玉古墳群一首長権の変遷と性格—」『考古学ジャーナル』No.201 ニューサイエンス社
- 増田 逸郎 1987 「埼玉政権と埴輪」『埼玉の考古学』新人物往来社
- 増田 逸郎 1991 「埼玉政権の法量的分析」『埼玉考古学論集—設立10周年記念論文集—』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 増田 逸郎 1999 「辛亥銘鉄劍と武藏国造」『國學院大學考古学資料館紀要』第一五輯 國學院大學考古資料館
- 宮本 義巳 1989 「鬼道につかえた女王の実体」『最新 邪馬台国論』学習研究社
- 森 浩一 1990 「古墳から伽藍へ」図説日本の古代5 中央公論社
- 森 浩一 1992 「継体大王の古墳と磐井戦争」『大王陵と古代豪族の謎』学生社
- 森田 悅 1988 『古代の武藏』稻荷山古墳の時代とその後 吉川弘文館
- 森田 悅 2006 「埼玉講座講演記録 古代史上の埼玉古墳群」『調査研究報告第19号』 埼玉県立さきたま資料館
- や 柳田 敏司 1978 『埼玉稻荷山古墳』埼玉県教育委員会
- 山尾 幸久 1972 『魏志倭人伝』講談社現代新書 講談社
- 山尾 幸久 1985 「文献から見た磐井の乱」『古代最大の内戦 磐井の乱』大和書房
- 吉川 國男 1988 「雄略紀所載の武藏国直丁と稻荷山鉄劍銘について」『調査研究報告 第11号』埼玉県立さきたま資料館
- わ 若松 良一 1978 「第3章 比企の大首長と武藏国造一首長墓の変遷からみたその位置づけー」『諫訪山33号墳の研究』
- 渡辺 貞幸 1978 「辛亥銘鉄劍を出土した稻荷山古墳をめぐって」『考古学研究』第25巻第3号 (99) 考古学研究会